

チベットの葬儀とその伝統文化について

高 松 宏 寶（クンチヨツク・シタル）

人が亡くなった時、家族や近親者が集まり、死者を弔うための儀式を行う。それは、古来より世界中で続いている習慣であり、現代の生活においても自然に行われている儀式である。このような儀式を行う場合、仏教が根付いている日本やチベットではお寺で執り行なわれることが多く、その内容も似ている点が多い。

智山伝法院の総合研究テーマである『伝統の創造』について、伝統的な宗教儀礼として古くから多くの人々に定着している葬儀に着目し、チベットの伝統文化を交えながら考察していく。

大乘仏教徒が大半を占めるチベットでは、輪廻転生を深く信仰しており、儀式にもその影響が強く反映されている。一方近年の日本の葬儀においては、宗教的な印象は薄れつつあるが、儀式のために僧侶を招くなど仏教との関わりは深く続いている。しかし亡くなった人を大切に思い、安らかに送り出したいという気持ちは、日本もチベットも同じではないかと思われる。亡くなった人をどのような儀礼で弔い、他界へ送り出すのか。そして、その儀礼はどのような意味を込めて行われるのか。現在のチベットで行われているこれらの内容について、彼ら



写真1 灯明（その1）

がもつ信仰心と宗教儀式の関係にも触れながら述べていきたいと思う。チベットの葬送儀礼は鳥葬が広く知られているが、その他にも大きな特徴がある。先にも述べたように、チベットでは輪廻転生を深く信仰しているため、死の瞬間を非常に重要なものとして受け止めている。それは、死の瞬間の心の状態が、次の生まれ変わりに大きな影響を与えると考え、古くから僧侶だけではなく家族も含めて、その瞬間を大切に切り扱う。これはチベットにおいて伝統的に行われている習慣であり、不慮の死など特別な場合を除いては、家族や近親者たちは当人が亡くなる直前から準備を始め、安らかに息を引き取れるように環境を整えるのである。その後、家族によって葬儀の手配が行われ、儀式そのものは僧侶に引き継がれていく。このように、葬儀は家族が行う役割と僧侶が行う役割がそれぞれあり、その後の法要などは両者が話し合いながら決めていく。

1. 家族が行う役割

家族や近親者などは次のような流れで弔いの準備を進めていく。
(1) 死を迎えるための環境を整える

死にゆく人の心を動揺させないように細心の注意を払う。安心して



写真2 灯明（その2）

死の瞬間を迎えるために、執着や心配、また心残りが起きないように、子供など当人の心が強い衝動を受ける者は近づけないようにする。また、信仰の対象を念じさせるために、バルトウテル（死者の書）を読経することもある。

そして、チベットの古くからある習慣の通りに、死にゆく人の末期のことば（遺言）を聞き取り、リンセル（仏舎利）を加えた末期の食事を与え、加持された浄水を末期の飲み物として飲ませる^①。また、当人の識を浄化し、他界へ行くための準備を円満に整える。これらの行為は、家族や近親者の心に死にゆく人を見送るための重要な役割を精一杯務めたのだという自負を生じさせ、大きな後悔を持つことなく、死者を見送ることが出来ると考えられている。

また、息を引き取った後、その遺体のそばに、出来ることが多い多くの灯明を供える。これは、供養を数多く行うことで亡くなった人の功德を増益させるために行う。また、チベットでは暗い場所に遺体を安置すると悪霊が入

ると古くから信じられているので、それを防ぐためにも必ず行われる。これは、土着宗教のボン教と後にインドより伝来した仏教が融合して、このような習慣が生まれたのではないかと思われる。また、この時の灯明には、悲しみを意味する植物油が使われ、動物から作られるバターなどの油は使われない。

そして、亡くなってから四十九日が終わるまでの間、遺族たちは髪をほどこき、顔を洗うこともなく、装飾品を身に付けることもせず、黒い衣服を着て過ごす。そして、自宅の屋上に掲げられている幟をおろし、歌舞音曲を慎む。また、故人の茶碗にお茶と食事を入れて供え、ツアスルと呼ばれる施餓鬼を毎晩行い、ティンシャ（小銅鉞）を鳴らすのである。^②

供養された灯明が一面に広がる光景は、日本の葬儀でよく行われる花で飾られた祭壇の様子と非常によく似ていると感じる。日本とチベットには距離があるが、表現の方法に共通したものがあり、興味深いと感じる。

(2) 占星術で遺体安置の日時、方角を決める

遺体を自宅から鳥葬場など遺体安置所に運び出す日時は、占星術によって決められる。残された家族などに悪い影響をもたらすことがないよう占星術師に依頼をし、亡くなった本人の干支と死亡した年月日に基づき占った結果から、遺体を運び出す日時や方角などを決定する。^③

これは遺体を明るい部屋に安置する習慣と同様、チベットの土着宗教であるボン教と、後にインドから伝来した仏教が融合した形の習慣である。



写真3 鳥葬

(3) 湯灌

トクデン (Tug Idan) とよばれる専門の湯灌師が、鳥葬や火葬に備えて遺体を洗う。トクデンは専門の湯灌師ではあるが、生業として行うことはない。集落の役割を代々担い、無報酬で執り行う立場の人をトクデンと呼ぶ。同じ集落の人であっても、専門の道具が必要であることや内容を熟知している必要があるため、容易に取り組める仕事ではない。彼らは地域社会において、不可欠な役割を担った重要な存在とされている。⁽⁴⁾

湯灌師の仕事の中にある遺体を洗う作業は、香りの良いハーブ入りのぬるま湯や、サフラン水、樟脳水を使い、丁寧に遺体を洗い、その後の儀式に備えて遺体の姿を整える。一説には、きれいに洗われた遺体はハゲタカが早く食べにくるといわれており、鳥葬の準備とも受け取ることが出来る。

(4) 野辺送り

一般的には鳥葬を行うが、感染症など特殊な病気の場合は土葬を行う。また、身分が高い死者は火葬を行った後、ストウーパを建立し骨を安置することもある。



写真4 火葬時の仏舎利塔

鳥葬は昔から行われてきた死者を弔う方法であり、一見すると非常に残酷な光景であるが、大乘仏教が根付いているチベットでは、死を迎えた後においても他者に対して布施を行うことで、亡くなった人の功德が増益するものとして受け止められている。

また、高地特有の厳しい自然環境も鳥葬が定着している要因と解釈されることもある。木々など燃料が少ない環境では簡単に火葬ができず、また極度の寒冷地では、遺体が土へ還るには長い時間が必要とするため、場合によっては環境負荷を与えることもある。

しかし、鳥葬であれば、そのような懸念は排除でき、厳しい自然環境においても、ハゲタカなどの野生動物は食料を得ることができ、結果として環境の保全に貢献しているのではないかと思われる。そのような観点においても、鳥葬が存在する意味は非常に重要なのだらうと思われる。



写真5 ツァツァ

(5) ツァツァ

高僧など身分の高い死者は火葬を行うことが多く、火葬の後に残る骨を用いたツァツァと呼ばれる仏像をたくさん作る。これは、火葬の後に残った骨を砕き、土と合わせて団子状に丸め、更に他の仏舍利を合わせ入れて形を整えた後、仏像の刻印を押して作られるのである。

以上が、家族や近親者が行う内容である。これらは、死期の迫った本人の心を安らかに保ち、他界後の生を守ろうとする愛情を込めた大切な行為であるが、善趣へ赴くための方向を決定するには、本人が行った心身の罪障の浄化や祈願が必要であり、宗教の力が重要となる。そこで儀礼を熟知した僧侶や行者に葬儀を依頼し、転移（ポワ）の儀式など執り行ってもらうのである。

2. 僧侶が行う儀式・役割

ここからは、僧侶が行う役割、具体的には、転移（ポワ）と死者の身口意を浄化するための仏教儀礼について述べていく。これは、追善供養であり、祈願（ムンラム）と浄化儀礼の2種類がある。

(1) 転移（ポワ）

チベット仏教的には、精神が肉体を離れた状態を死とする。息を引き取った状態で、一見死んだように見える状況であっても呼吸や心臓が止まっているだけで、意識は身体に残り、瞑想状態となっている可能性もある。そのため、3日間は遺体を外に出さないように配慮する家族も多い。

また、その意識が外へ出る際、身体の中の場所から出るかによって、転生の結果が変わってしまう。このため、意識を頭頂へ導き、出来る限りその場所から外へ出すために、古代インド密教のナロー六法という行法に基づいて、転移（ポワ）という意識を引導するための儀式を行う。

これは、家族が高僧や密教行者に頼む儀式であり、お礼を渡して執り行ってもらう。遺体安置されている場所に僧侶が招かれる場合もあるが、お寺にいる僧侶が場所を移動することなく、その場で行う場合もある。ただ、この儀式は、全ての家族が依頼する内容ではない。

(2) 僧侶が行う法要および葬儀

① 祈願儀式

チベットの葬儀では、自宅に僧侶を招いて行う法要と、お寺に向いて行う法要がある。この法要は、死の直後の識を安楽にさせ、浄土や仏門などに導くための祈願 (Pranidhana) であり、宗派に依らず行う儀式である。宗派によって異なるが、ゲルク派においては9つの祈願の経文がある。これらは特別な楽器や声明などを伴うことなく、祈願のお経のみをゆっくり唱える。

この祈願を唱える前には、十分な灯明を用意し祭壇を作る。そして、三宝の帰依および発菩提心の経文を唱えてから、七支分の供養や礼拝などの行法を行い、三十五仏の懺悔の経文 (spyi bsilags / Itungs bsilags) や、極楽浄土などの祈願文を唱える。真言宗や天台宗では、このような場面に十三仏が出てくるが、チベットでは八大菩薩や無量光の二大弟子が出てくることが多い。

この祈願文は、死者が死後の世界、つまりバルトを通して浄土へ行くために唱えるものであり、バルトの時に、阿弥陀如来とその二大弟子や八大菩薩たちが現れて、救済してくださるようにと願う内容である。例えば、ツォンカバ大師の『極楽往生願文』にあるように、「臨終において、無量光仏 (阿弥陀仏) と菩薩衆が現前され、そのとき私は勝者 (仏) と菩薩たちに対して強い信心をおこし、ひどい悲しみという苦しみがなく、信心の対象を忘れることなく念じて、私は速やかに死を変容し、八大菩薩の神変によって、極楽浄土の宝なる蓮華から、大乘の種の利根の者として生まれることができますように」と説かれた内容がある。⁵⁾

一方で、大乘仏教の菩薩の行を体験できるように願うお経として『普賢行願讃』などがある。この経文の中の「私が死ぬ時になったなら」というところから「有情たちに多くの利益を為しますように」⁶⁾までの四偈頌が引用

されることが多い。

ゲルク派では、このような経文を九種類唱える。次に、大乘仏教の実践（菩薩の祈願）や誓願の祈願文の一覧を示す。⁷⁾

I 「普賢行願讃」

II 「聖弥勒祈願文」

III 「極樂浄土の祈願」

IV 「初、中、後の（善なる）祈願」

V 「入菩薩行の廻向の祈願」

VI 「釈迦牟尼に至るまでの祈願」

VII 「弥勒色の祈願」

VIII 「主な勝者の祈願（八大菩薩への祈願）」

IX 「大樂自然成就の祈願」

ただし、極樂浄土の祈願は宗派によって経文の内容が違う。しかし、どの宗派においても無量寿経と阿弥陀経の2つに基づいており、宗派ごとに短く集約させた形をとって経文としている。この件に関しての研究は、現在は数多くなされている。

②死者の浄化儀礼 (gshin po sbyang chog)

葬儀では、死者の身口意を浄化するために様々な密教儀式を執り行うが、その由来はお釈迦様の時代に説かれ

た「悪趣浄化タントラ」である。その経典を受けて、チベット仏教においても伝統的に同様の儀礼を行う習慣ができたのである。

この「悪趣浄化タントラ—Durgatuparishodhana tantra」⁽⁸⁾は、帝釈天が、自己の知己で亡くなったインドの神ヴィマラマニプラバが、その後、どのような境遇に生まれ変わったのかについてお釈迦様に尋ねた際、その境遇の内容を知り、恐れおののいた帝釈天が、ヴィマラマニプラバや悪趣に苦しむ全ての者たちが、苦悩の連続から逃れるための術を説いてください⁽⁹⁾とお釈迦様に懇願し、その願いに對しお釈迦様が説かれたものである。これは、インド中期密教の経典であり、チベットでは広く知られている。

この儀式は、密教行者や僧侶が死者のために行うものであり、金剛阿闍如来 (rGyal ba rdo rje mi khregs pa) や普明大日如来 (kun rig nam par sang ndzad)、または、薬師如来やヤマインタカの儀軌 (文献) と、その他には、『白傘蓋』、『尊勝仏母儀軌の陀羅尼』などの経典に基づいた様々な浄化儀礼が存在し、チベット仏教の葬儀では、これらの儀礼を葬儀の中で執り行う。今回、筆者は金剛阿闍如来の浄化儀礼を取り上げることにした。

この浄化儀礼は、密教儀礼と同様に僧侶や行者たちが、自分自身を金剛阿闍として観想する。そして、曼荼羅に入り戒律を受けて、金剛阿闍の本尊瑜伽の儀軌に基づき浄化儀礼を行う。その後、七支分の供養の準備を行う。この儀礼の主たる目的は、死者の身口意全ての罪障と様々な障害を浄化し清め、浄土や阿闍如来の境地に導くことである。この時、僧侶や行者たちは、この儀軌を行うため次に示す前行を行う⁽¹¹⁾。

- 死者を椅子に座らせるなど瞑想の姿に整え、手を合掌させてから、亡骸に死者自身の蘊、処、界を明確にそして、完全に生きているものの姿として招いて、その姿の形で安置する (図1)。



図1 死者の瞑想の姿

• その状態で、金剛阿闍の曼荼羅の尊格や三宝の加持、五智如来の真言や印相、そして念誦などによって完全に加持する。

• 死者の意識に呼びかけを行い、亡骸にその意識を入れ、実際にその中にいると観想しながら、密教行者自身の胸から光が放たれると観想する。

• 死者の生前の名前の最初の一字を取り、それを本人の姿として考え、そこに意識を入れる。それと同時に、全ての苦しみから救済されますようにと祈願する。

• 死者の頭頂、喉、胸に om, ah, hūm の三つの種子をそれぞれ荘厳し観想する。そして、真言を唱え加持力を授けたと考える。

この前行が終わった後、忿怒尊を虚空にお招きして、死者の罪障を浄化する。そして、マラーに對して、「他界へ転移（転生）することを妨げる全て

の障害を与えないで下さい」、「邪魔をしないで下さい」と命令し、トルマ供養をしてお祓いをする。

その後、前行による心身の浄化が終った死者を仏門に導き、善趣や浄土、または仏国土などに導くため、次に示す浄化儀礼の幾つかを行うことが多い。⁽¹²⁾

I. 密教護摩による浄化儀礼

II. 陀羅尼と真言の念誦による浄化儀礼

III. 浄水による浄化儀礼

IV. 灌頂による浄化儀礼

V. 仏国土に導く浄化儀礼

これらの浄化儀礼の内容を次に示す。

I. 密教護摩による浄化儀礼

観想の内容は次の通りである。

- 死者の足の下に風輪がある。
- その風輪のエネルギーが死者の臍のところへ流れ、臍にある智慧の火を燃えさせ、胸にある種子、罪障を示す黒いパム字に当たり、燃えて焼き尽くされる。
- 更に足の下の方から風輪から風が出て、それが火となり、胸のパム字にあたる。

- ・ パム字にあたったものは鼻から光として出てきて、ゴマの如く小さな粒となり、護摩材となる。
 - ・ 護摩材が護摩焚きに溶け込み、焼き尽くされる。
- このような流れを観想し、死者の罪が浄化されたことになる。⁽¹³⁾

Ⅱ. 陀羅尼と真言の念誦による浄化儀礼

陀羅尼や念誦を唱えることによって死者の罪障、特に三惡趣に落ちないように浄化を行う。その結果として、特別な姿を得られ、仏門に入ることができ、最後に悟っていく過程を観想する。そして、すみやかに世尊金剛阿闍の仏国土に導くことを祈願する。⁽¹⁴⁾

Ⅲ. 浄水による浄化儀礼

罪障の浄化が目的である。曼荼羅を浄水によって浄化し、死者の身口意の罪障を浄化するために、尊格の金剛なる身口意を浄化したと観想する。その結果として、死者が金剛なる身口意を得るように祈願する。

この時、死者の身体そのもの、または浄化した名前、それらがいない場合は、人形や写真など死者と類似するもの、これらのいずれかを用意し、それを浄化儀礼の対象として儀式を行う。この儀礼の目的は、大乘仏教の六波羅密の障害となる六の煩惱の浄化である。⁽¹⁵⁾

Ⅳ. 灌頂による浄化儀礼

灌頂による浄化儀礼においては、死者が生前に密教の灌頂を受けた人であれば、この時に再び灌頂を授ける。

受けていない人であれば、ここで完全な灌頂を授けず、菩薩戒と三昧耶戒を授けて、曼荼羅の秘密を守るための誓いを立てさせ、曼荼羅に入壇する許可を与え、本尊を紹介する。それだけでも功德を積むと言われているが、ここでは死者を本尊として生起し、その人の識を阿字として完成し、そこから世尊金剛阿闍になったと観想を行い、本尊の名前を聞いただけで悉知を完成したと考える。

そのような方法で死者が功德を円満にしたので、大きな利益を得た。このような浄化儀礼を行い、死者の心身を清らかにして浄土に導く、または完全なる阿闍如来の悟りの世界に導くと観想を行う。⁽¹⁶⁾

V. 仏国土に導く浄化儀礼

ここでは、死者に浄土や仏国土の莊嚴された世界観とその功德を言い聞かせ、強い信心と善趣へ転生することの強い願いを生じさせる。そして、行者が金剛阿闍如来に礼拝と帰依を行い、この死者を仏国土に今こそ逝かせてくださいと三宝に強く祈願する。

実際の行動は、死者の識を本尊として生起し、世尊金剛阿闍如来から放たれる光の鉤によって引導し、その識が頭頂から出て仏国土に障害なく導き、世尊阿闍如来の蓮華台の生化となり、菩薩たちが迎え入れる。そして、死者が世尊阿闍如来と直接出会い、供養をして帰依と礼拝を行い、説法を聴聞し、仏門に完全に入る。その後、死者は衆生を助けるために誓願を立て発心を起こし、利他行を行うための準備を行っていく。⁽¹⁷⁾

このように護摩などの浄化儀礼における祈願は、根本的には護摩の薪火によって浄化する内容であり、死者に次のような美しい言葉で語り掛ける。

〃五蘊の薪によって五智如来の智慧の火がつけていく〃

〃四大の薪によって四人の母尊の智慧の火をつける〃

〃六根の薪によって諸々の菩薩たちの智慧の火が燃えて、六境の薪によって六人の明妃の智慧の火が燃える〃

〃身口意の薪によって仏陀の三金剛の火が燃える〃

〃そして、三仏身と五智を伴って利他行を行うように〃

と祈願する。¹⁸これは、五大要素と煩惱などの心を一体化させた密教的な観法だといえる。

このように、護摩の火と加持した浄水と聖なる言葉（真言）、最勝なる灌頂、仏国土への導きによって死者を救済する。

チベットでは、このような儀式を2～3時間かけて盛大に行う。この時のご本尊は僧侶や行者の立場によって変わるため、以前にも述べたように薬師如来や大日如来、金剛薩埵など様々おられる。

葬儀が行われた後、家族や近親者たちは身を慎む行動をとり、お供えをし、施餓鬼などを行う。僧侶や行者たちは、日本と同じように中隠法要と一周忌などの儀式（年忌）を行うのである。

3. 中隠法要と年忌

チベットにおける中隠法要と年忌は、亡くなった日から一週間後（初七日）、二週間後、三週間後、四週間後、合わせて四回の追善供養を行う。これは、死者が三善趣や浄土に生まれ変わるために祈願し、功德を積むために行うのである。

また、『俱舎論』によると、識が中有になくなるのは第三週目であり、重要な意味を持つとされる。このため、

この時期に該当する三週間後の法要は盛大に行われる。

そして、七週間後（四十九日）には、中有の生の期間がなくなり次に生まれ変わるため、ツォクコル（供養儀式）と盛大なる灯明供養を行う。家族や近親者は、亡くなった人の生まれ変わりが無事に済んだと受け止め、感謝と喜びをもって多くの供養を行うことが多い。

そして、これまで葬儀に関わった全ての人々に対して、家族がお礼を渡していく。僧侶にはお布施を、親戚や友人にはお礼のカターを差し上げることが一般的である¹⁹。

一周忌では、家族や親戚、友人など数人が僧院に出向いて灯明などの供養をする。また家に数人の僧侶を招き、祈願と儀式をお願いして修法してもらう。場合によっては、家だけではなく僧院においても、祈願の読経をあげてもらう。經典はこれまでと同じものが多いが、亡くなった時のような盛大な法要は時間も費用もかかるため、お寺の状況や家族の経済的な負担などを考え、実際には控えめな儀式を執り行うことが多い。

今回は、死者を弔うとき、チベットではどのような葬送儀礼を行うのかについて、在家の家族や近親者、そして僧侶や行者の二つの立場から考察をしてきた。

これまでの考察をまとめると、亡くなった人の家族は、追善供養を行うために多くの財産を布施し、亡くなった時点で、素早く沢山のお寺に数多くの灯明を布施する。この時は、宗派に依ることなく布施を行うことが一般的である。そして、家族から依頼を受けた僧侶は、チベットの伝統に沿って祈願と誓願を行うのである。

これは、死者が他界の善趣や極楽浄土に障害なく赴くためであり、密教行者や僧侶たちが密教の教えに基づきながら様々な浄化儀礼を行うことで、死者の意識を大乘仏教的な高いレベルの仏門の道に導き、解脱や悟りの境

地まで救済することが目的である。この儀礼に現れているように、チベット社会では死後の世界も今生と同じように重要なものとして考え、在家、僧侶ともに相互扶助の関係で葬儀を行っていくのである。

また、チベット人は、家族の死も自分の人生の一部として責任を持つものであると考えている。つまり、亡くなった後、より良い世界へ見送るのは、残った人の義務であり、愛情を示す行為なのである。最後に与えられたその義務を精一杯務めることは、残った人の後悔も自然と少なくなり、現代におけるグリーンフケアのような役割を果たしているのではないかと考えられる。

これは、人々の習慣的な儀礼となった葬儀においても、仏教という宗教信仰が長く続く中で、その影響が反映されてきたと見受けられ、興味深い内容ではないかと考えている。

註

- (1) Cf. Sangay T. (1974) : P. 1. (kha skad la: "gram gyi tha ma kha chems dang/ zas kyi tha ma 'phel gdung dang/ btung bai tha ma byin rten red" // ces zer srol yod pa red : Onoda Sh. (1992) : P. 206.
- (2) Cf. Sangay T. (1974) : P. 5. Onoda Sh. (1992) : P. 210.
- (3) Cf. Onoda Sh. (1992) : P. 210-11.
- (4) Cf. Sangay T. (1924) : P. 10-11
- (5) Cf. Sherig P. (2004) : "nam zhing tshe yi 'du byed grong ban a/ 'khor tshogs rgya mtshos bskor bai 'od dpag med // mig gi lam du gsal bar mthong gyur te // dad sogs snyings rjes bdag rgyud gang bar shog // bar do'i snang ba shar ba gyur ma thag // rgyal stras brgyad kyi ma nor lam bstan te // bde ba can skyes nas sprul ba yis // ma dag zhing gi 'gro ba 'dren gyur cig" // P. 469, 1.5 ~10.
- (6) Cf. Sherig P. (2004) : "bdag ni 'chi bai dus byed gyur pa na/ sgrib pa thams cad dag ni phyir bsal te/ mngon sum snang ba mtha'i yas de mthong nas // bde ba can gyi sling der rab tu 'gro // P. 492, 1b2-493, 15

- (7) チベット仏教のゲルク派の葬儀において唱える祈願文は以下の通りである。
- i s'pyi bshags / l'ung bshags // Toh. No. 6839.
 ii b'zang po spyod pai smon lam gyi rgyal po // Toh. No. 6940.
 iii 'Phags pa byams pai smon lam // Maitreya-praṇidhana ; Toh. No. 6941.
 iv bDe ba can du skye bai smon lam // Toh. No. 6944.
 v 'Thog mtha' bar gyi smon lam // Toh. No. 6943.
 vi s'pyod 'jug smon lam/ (Bodhicaryavatara) ; Toh. No. 6942.
 vii ji srid thub mchog ma/ Toh. No. 6945.
 viii bYams pai sku gzugs // Toh. No. 6946.
 ix gTso rgyal mo// Toh. No. 6939
 x bDe chen lhun grub ma// Toh. No. 6947.
- (8) 『悪趣浄化タントラー *Durgatipariśodhana tantra*』については多くの研究論文および翻訳があるが、今回は桜井宗信氏の研究、特に死者に関する追善供養を参考にしている。英訳においては cf. Skorupski T. (1983) の著作がある。この経文の註解は Sakurai M. (2005) P. 131-160. に解説している。また、中蔵の Nakashima K. (2012) *Buddhaguhya & Ānandagarbha* の注釈や中蔵の註について研究論文がある。
- (9) Cf. Sakurai M. (2007) : P. 137-138.
- (10) Yongs 'dzin Ye shes G. (TBRC) : *bCom lan 'das rdo rje mi 'khrugs pa i sgo nas sbyang chog bay ba i tshul/ Thar pa'i lam ston zhes bya ba* // Toh. No. 6039
- (11) Yongs 'dzin Ye shes G (TBRC) : P. 356, 15-358, 14.
- (12) 浄化儀礼の実態 (本行) には五種類がある。それらは以下の通りである。
- 1) sBying sreg gi sgo nas sdiḡ sgrib sbyang ba/
 2) phyir bzlog brab sNags kyi sgo nas sdiḡ sgrib sbyang ba/
 3) Khrus kyi sgo nas sdiḡ sgrib sbyang ba/
 4) sMin byed dbang gi sgo nas diḡ sgrib sbyang ba/
 5) Grol byed spor chog gi sgo nas diḡ sgrib sbyang ba// TBRC (yongs 'dzin Ye She G.). P. 361-375.
- (13) Yongs 'dzin Ye shes G. (TBRC) : P. 358
- (14) 同 P. 361L3-362L5.
- (15) 同 P. 362L5-364L1.
- (16) 同 P. 364L1-371L2.
- (17) 同 P. 371L2-372L2.
- (18) 同 "gson cig dgonḡs shig/ rigs kyi bu/ X2/ phung po lnga yi bud shin la/ rGyal ba lnga'i me sbar ro// 'byung ba bzhi yi bud shin la/ lhamo bzhi yi me sbar ro// dbang po drug gi bud shin la/ byang chub sem dpa'i me sbar ro// yul rnam drug gi bud shin la/ lhamo drug gi me sbar ro// lus ngag yid gsum yi bud shin la/ rGyal ba'i

sku gsum me sbar ro/ sku gsum ye shes lnga ldan du/
'Gro ba'i don du 'gyur bar shog // P. 374/4-6-
(19) 同 P. 372L2-374L3.

参考文献

- bKra shis ed. (1994) : *bDe smon phyogs bsgribs, stod cha & smud cha*, 祝詞集' 四川民族出版社' 1994.
- Chisan kangaku kai (2017) : 『葬送葬礼と現代社会』' 青史出版' 2017.
- Nakamiko K. (2015) : チョネ・タクパシエードupp著『極楽国土の莊嚴の話—その国土に往く階梯—』の和訳研究—浄土教の成立興起くの問題提起' 仏教学会紀要' 第20.
- Nakashima K. (2012) : 『一切悪趣清浄儀軌』の研究—Buddhaguhyaの註釈を中心に' 起心書房' 2012.
- Onoda Sh. (1995) : 「チベットにおける葬送儀礼」' Baker 仏教大 学論文目録リポジトリ
- Onoda Sh. (1981) : ションカバ造「最上国開門」試訳—チベットにおける本願思想受容の一例と—」『佛教文化研究』—27, 1981.
- Thurman R. (1982) : "Prayer for Rebirth in Sukhavati" by Je Tsong Khapa. Library of Tibetan Works and Archives, *The Life and Teachings of Tsong Khapa*, Dharmasala, 1982.
- Sakurai M. (2007) : 「インヘン後期密教における葬儀と追善」' 『現代密教』第19号' 智山伝法院
- 同— (2008) : 「Jñānapāda 流の伝える死者蘇生儀礼」' 『現代密教』第20号' 智山伝法院
- 同— (2005) : 「死者の救済と後生安樂を旨として」' 『インヘン後期密教』上' 春秋社' 2005.
- Sangay, T. h. (1974) : "Bod mi'i 'das mchod", *Tibetan Ceremonies of the Dead*; Library of Tibetan Works and Archives, Dharmasala, India.
- Sherig P. (2004) : *bLa ma'i mral 'byor dang yi dam bñag gi bdag bskye dzogs zhal 'don gces btsus bzñugs so* // Sherig Pharkhang, Delhi, 2004.
- Skorupski T. (1983) : *The Sarvadurgatiparisodhana tantra - Elimination of All Evil destinies*; Motilal Banarsidas, Delhi
- Yongs 'dzin Ye shesG (BDRG) : *bc om ldan 'das rdo rje mi 'khrugs pa'i sgo nas sbyang chog bya ba' 'tshul thar pa' 'lam ston zhes bya ba* //, Toh. No. 6039, Buddhist Digital Resource Center, MA, USA.
- Waddell, A. L. (1972) : *Tibetan Buddhism/ Lamaism*; With its Mystic Cults, Symbolism and Mythology, Dover Publication, New York, 1970.
- 〈キーフレーズ〉
チベットの葬送儀礼 チベットの浄化儀礼 鳥葬 追善供養